

R

KANSAI
UNIVERSITY
NEWSLETTER

Man is a Thinking Reed.

Reed

No. 84

March, 2026

関西大学ニュースレター

発行日：2026年(令和8年)3月25日
発行：関西大学 総合企画室広報課
大阪府吹田市山手町3-3-35
〒564-8680 / TEL.06-6368-1121
www.kansai-u.ac.jp



世界を見据え、未来へ踏み出す 大阪から社会にインパクトを OSIPチエンジメーカーズが世界を拓く

■鼎談
パトリック・ハーラン(パツキン)・タレント・関西大学客員教授
高橋 雅英・大阪公立大学 副学長
竹内 理・関西大学 副学長

- 鼎談 — 1
- リーダーズ・ナウ — 7
- 卒業生 — 芸人(吉本興業所属)・映画監督 ゆりやんレトリィバァさん
レディースクリニック サンタクルス ザ シンサイバシ 院長 藤田 由布さん
全日本空輸株式会社 運航乗務員 酒井 雄生さん
- 在学生 — 経済学部 3年次生 渡部 朝士さん
文学部 2年次生 マスード・アフアフさん
- 研究最前線 / Research Front Line — 17
- 文化人類学の研究
アフリカ島嶼国カーボヴェルデでクレオール文化を研究
文学部 青木 敬 准教授
- ・ Studying Creole Culture in Cabo Verde, an African Island Nation
Faculty of Letters — Associate Professor Kay Aoki
- トピックス [学内情報] — 21
- 関西大学協賛の「大阪マラソン2026」開催
関大ランナーやボランティアなど約400人が大躍動 ほか
- 関大ニュース — 23
- インドの教育コンサルティング企業Acumen社と覚書を締結 ほか



世界を見据え、未来へ踏み出す 大阪から社会にインパクトを

●OSIPチェンジメーカーズが世界を拓く

パトリック・ハーラン (パクン) ・タレント・関西大学客員教授

高橋 雅英 ・大阪公立大学 副学長

竹内 理 ・関西大学 副学長

2024年度に文部科学省の事業に採択された、「大阪・チェンジメーカーズ：課題主導の社会的インパクト共創教育プロジェクト」(OSIP)。

関西大学と大阪公立大学が連携し、大阪から社会を変革する次世代リーダーの育成を目指す本プロジェクトをテーマに、竹内理副学長と大阪公立大学の高橋雅英副学長、そして「パクン」の愛称で親しまれるパトリック・ハーランさんが、人材育成や多文化共修などについて語り合った。

Osaka Social Impact Project(OSIP)の概要

2024年度に関西大学が大阪公立大学と連携して申請した「大阪・チェンジメーカーズ：課題主導の社会的インパクト共創教育プロジェクト(Osaka Social Impact Project)」(以下OSIP)が、文部科学省「ソーシャルインパクト創出のための多文化共修キャンパス形成支援事業(タイプI：地域等連携型)」に採択されました。

OSIPとは、大阪を拠点に異なる文化・分野・組織・環境などを越えた「越境的な学び」を通じて、次世代が直面する社会課題を「自分事」としてとらえ、解決に向けて行動する次世代のリーダー「チェンジメーカーズ」を育成することを目的とした取り組みです。

事業期間
2024～2029年度の6年間

■OSIP 関西大学の目標値

	2023年度	2029年度
多文化共修科目数	43科目	571科目
多文化共修科目参加学生数(延べ)	876人	16,245人
日本人学生の海外留学人数	949人	2,088人
外国人留学生数(短期留学生含む)	1,970人	2,876人
外国語(英語)による授業	482科目	1,500科目



OSIPの2つの柱

多文化共修

異なる文化的背景を持つ学習者が、対等な立場で協働しながら学ぶ学習形態のこと。「相手を理解する」にとどまらず、異なる価値観や経験に向き合いながら学ぶ中で、双方が変化していくことを重視し、異文化理解と共感性、コミュニケーション能力、多角的な視点、社会的課題に向き合う思考力と問題解決力の育成を目指す。

優秀な外国人留学生のキャリア形成

大阪・関西の強みであるホスピタリティやものづくり、グローバル事業を展開する企業が必要とする人材を積極的に受け入れ、学修と実践の機会を通じて、日本企業での就職につなげる支援を行う。

大阪から世界へ—— OSIPが育む社会課題に挑む力 ●国際部教授 池田 佳子



日本では、少子高齢化や人口減少による労働力不足や地域経済の縮小など、将来を見据えた構造的な課題が深刻化しています。このような変化の中で求められるのは、多様な価値観を理解し、さまざまな国の人々と協働しながら課題解決に挑む力です。

関西大学では、こうした社会的ニーズを受けて国際化を推進しており、2014年には全国に先駆けて「オンライン国際協働学習(COIL)型教育」を導入。2018年度に文部科学省「大学の世界展開力強化事業」にCOIL型教育が採択され、2023年度には東北大学および千葉大学と連携した「BM(Blended Mobility)」の取り組みが同事業に採択されました。また、文部科学省委託事業の留学生就職促進プログラム「SUCCESS-Osaka」では、外国人留学生へのキャリアサポートに取り組んできました。

OSIPではこれらのノウハウを基盤とし、世界・アジアの国際都市としての発展が進む大阪において、イシュードリブン(課題本位・課題解決思考)の姿勢、越境的な思考回路と躊躇しない考動力を伴う「人材」を育成し、国際社会に貢献します。

■鼎談



高橋 雅英—たかはし まさひろ

大阪公立大学副学長。1996年神戸大学自然科学研究科物質科学専攻博士課程修了。豊田工業大学大学院工学研究科博士研究員、神戸大学ベンチャービジネスラボラトリー博士研究員、京都大学化学研究所准教授などを経て、2009年より大阪府立大学大学院工学研究科教授、2022年より大阪公立大学工学研究科教授。イタリア、ブラジル、オーストラリア、中国の大学で客員教授を務めた。2011年日本セラミックス協会学術賞、2021年日本化学会学術賞などを受賞。2025年より現職。

世界では「自分の意見を持つているか」が問われます。まずは自分の意見や見解を的確かつ堂々と表明できる人材を育成すること。

学生たちには、異文化への興味と関心を持つことから始め、国際感覚を養い、柔軟な思考で社会問題を解決して欲しい。



竹内 理—たけうち おさむ

関西大学副学長、国際部長。1987年神戸市外国語大学大学院修了。1992年フルブライト奨学金による留学で米国 Monterey Institute of International Studies 大学院修了。2005年兵庫教育大学連合大学院より博士号(学校教育学)取得。同志社女子大学学芸学部、関西大学総合情報学部などを経て、関西大学外国語学部・大学院外国語教育学研究科教授、外国語学部長、大学院外国語教育学研究科長、学校法人関西大学理事、大阪府教育委員などを歴任。大学英語教育学会学術賞、外国語教育メディア学会学術賞なども受賞。2024年より現職。

タンク機能を担う大阪公立大学と、地元企業との強固なネットワークを持つ関西大学が連携し、行政・産業界と協働しながら、実社会の中で学生たちが課題解決の経験をするように学びをデザインしていきます。

バックン OSIPにおける多文化共修とは、どのような学びなのでしょう？

竹内 多文化共修とは、異なる文化的背景を持つ人たちが対等な立場で協働しながら学ぶ学習形態のことです。日本人学生だけで学ぶと、どうしても考え方が一面的になりがちですが、外国人留学生が加わることで多様な視点加わり、発想や思考の幅が大きく広がります。文化や言語が異なる相手と話し合い、合意形成を図るのは簡単なことではありません。しかし、そのプロセスこそが、英語の運用能力だけにとどまらない、発想力や思考力、コミュニケーション力など幅広い能力の伸長につながります。

外国人留学生には日本での学びを世界で活躍するためのキャリアパスとして、日本人学生には、多文化共修での学びを世界へ羽ばたく一歩として考えてほしいと思います。海外から日本へ、日本から海外へ——学生たちの受入れと派遣が一体となって循環していく。OSIPは日本だけではなく、国内外の人材育成を見据

えた構想なのです。

バックン なるほど、素晴らしい取り組みですね。

高橋 関西大学からOSIPのお話をいただいた時は、大阪公立大学でも全学的な国際化を推進し始めた時期で、OSIPへの参画はその流れを加速させる契機になると感じました。大阪における地域課題を考えることは、同時に世界との接点を考えること。またOSIPを通じて社会共創の取り組みを進めていくことは、学生にとっても私たち研究者にとっても大きな意義があります。関西大学と連携して「チェンジメーカーズ」を育成し、大阪から世界を変えていきたいとOSIPへの参画を決めました。

バックン 学生なら誰でもOSIPの授業を履修できるのでしょうか？

竹内 関西大学では、OSIPのコンセプトに基づく「多文化共修科目」を、全学共通科目はもとより、全学部の専門科目にも展開しつつあります。学生は所属する学部の専門科目および全学共通科目の中から「多文化共修科目」を選択し、授業を受講することが可能です。

高橋 大阪公立大学でも同様に、正課科目の中に多文化共修科目を設置しています。

竹内 関西大学では計14,000人程度が受講する必修科目(外国語科目)においても、多文化共修科目の要素を取り入れるよう改善を進めています。また、正課の授業だけでなく、正課外でもプログラムを充実させており、OSIPを通じて大学全体の国際化を包括的に進めています。

バックン 関西大学と大阪公立大学の多くの学生たちが参加でき、地域社会に影響を与えながら、国際的な視野を持つ人材を育成していくプロジェクトなのですね。

◆「多文化共修」が新しい思考回路をつくる

バックン 母語が日本語ではない人たちと交流しながら学習することは、とても重要だと感じています。たとえ片言であっても相手の言葉の背景にはどんな文化があって、何を望んでいるのか。それらを瞬時に汲み取る力を高めることができます。また、母語で思い浮かんだ言葉にぴったり当てはまる外国語の単語が見つからなければ、迂回ルートに切り替え、別の適切な言い回しに変換しなければいけません。この試行錯誤、迷路の探索こそが、脳と思考を鍛えるのです。母語にない表現を学ぶことは、母国にない概念を学ぶということ。私は日本語を話す時は性格も変わりますが、アメリカ出身の私が英語から日本語の脳にスムーズにギアチェンジできるようになったのは、自分の脳がそれだけ成長したという証し。外国語を習得するということは、脳のCPUのスペックが上がるようなものだと思います。

また、多様な国の人たちと議論する場では、自国の文化などバックグラウンドを正しく理解していないと、相手を納得させる説明はできません。意思疎通がうまくいかない場合、実は言語の壁ではなく「文化の壁」が原因であることも多いのです。例えば日本では「私語禁止」という貼り紙をよく見掛けますよね。アメリカ人の友人が数人来日した時に、私語禁止の説明をしたところ「私的な会話を禁止するなんておかしい」と皆に驚かれ、私語禁止の貼り紙が私語のきっかけになってしまったのです(笑)。「No Private Conversation」という英訳は伝わっても、その背景にある文

社会に出ると正解がない問題ばかりです。その中で高い成果やイノベーションを起こすためには、考える力、議論する力、自分の意見を持つ力が必要です。正解がない問題に向き合う力こそ、これからの教育に必要ではないでしょうか。



パトリック・ハーラン

お笑い芸人。タレント。コメンテーター。1993年ハーバード大学比較宗教学部卒業。同年来日、英会話学校講師などを経る。1997年、吉田真とお笑いコンビ「バックスマックン」を結成。「バックン」の愛称で親しまれる。テレビ、ラジオ、イベントなど幅広いフィールドで活躍中。東京科学大学非常勤講師。流通経済大学客員教授。2025年度関西大学客員教授。著書に「世界と渡り合うためのひとり外交術」(毎日新聞出版)、「バックンの「伝え方・話し方」の教科書 世界に通じる子を育てる」(大和書房)など多数。

化的な概念はすぐには伝わりません。国際交流とは、言語を超えた発見、新しい概念に出会う機会でもあるのです。

竹内 バックンさんのおっしゃる通り、世界の見え方が変わってきますね。

バックン また外国人は、日本では「当たり前のこと」に疑問を投げ掛けてくれます。その疑問に対して明確な理由を説明できなければ、もしかしたら日本人自身にとっても改善の余地がある制度や仕組みで、新しいイノベーションの源泉になるのかもしれない。「当たり前」という前提を疑う視点が生まれることは、多様性の中で生きる上での大きなメリットだと思います。

高橋 バックンさんのお話は、個人が持つアイデンティティの問題にもかかわってると感じます。「私語禁止」に対してアメリカ人が素直に疑問を呈することができるのは、自分の文化やアイデンティティに自信があるからではないでしょうか。日本の学生たちにも日本人としての自己肯定感を高く持った上で、外国人の疑問に向き合い、積極的に議論を交わしてほしいですね。このような越境的な姿勢や思考がなければ、チェンジメーカーは生まれません。多文化共修で得られる小さな気づきが、大きな学びへとつながっていく。ここにOSIPの意義があると思っています。

■鼎談

◆小さな成功を積み重ね「自己効力感」を高める

竹内 日本人学生は「もう一步」が踏み出せず、留学をためらう傾向があるように感じています。日本の住み心地が良すぎるのかもしれませんがね。異文化に飛び込むことの大切さや面白さを学生に伝えるためにはどうすれば良いか、バックンさんの考えをお聞かせください。

バックン まずは留学の価値や重要性の本質を学生にしっかり伝えたいですね。留学を経験することで思考力やコミュニケーション能力を高めることができますし、他者を知ることで自国の文化や価値観を相対化することができます。私自身もそうでしたが「自分を求めてくれる場所」を新たに見つけることができるかもしれない。留学は自分自身を再発見する機会、自己成長につながる体験なのです。

さらに、より根本的な課題として、「野心」を持った若者が日本には少ないという印象があります。「成功したい」「何かを成し遂げたい」「世界を驚かせたい」という熱い思いが、もしかしたら心の奥底に潜んでいるのかもしれませんが、溢れるほどみなぎっていない。ではその強い心をどう涵養するかと考えると、大学からスタートでは少し遅いかもしれません。アメリカ人は幼少期から「あなたはすごい」「あなたは世界を変えられる」という言葉を聞かされ過ぎて、自信過剰になっている人もいますが(笑)、逆に日本は謙虚になり過ぎて、日本人にはその魔法の言葉が必要だと感じています。志の高さと謙虚さを持ち合わせた、自己肯定感の高い人材を幼稚園から大学院まで一貫して育成し、日本社会だけではなく世界に輩出してほしいと思っています。

竹内 関西大学は幼稚園から大学院まで設置していますので、責任が重大ですね。

高橋 幼少期から野心を育むのはもちろん重要ですが、大学からでも涵養できる部分もあると思っています。例えば国際共同研究の論文がインパクトファクター(IF)の高い学術雑誌に掲載ことや、国際会議での受賞など、海外で「自分が認められる」体験は学生の野心を育みます。

竹内 日本人は海外での成功体験が少ないため「セルフ・エフィ

カシー(自己効力感)」——つまり「これなら自分ではできる」という信念が不足しているのかもしれませんが。OSIPでは小さな成功体験を積み重ね、大きな体験へとつなげてほしい。例えば、まずは地域の課題解決という成功体験を経て、海外へと活動の場を広げ、国際学会発表や現地での課題解決に挑戦し、自己効力感を高めていく。日本では「アンビシャス(野心的)」になるための教育が求められているということですね。

バックン 一つ補足すると、昨今は世界に飛び出さなくても国際的な活動ができる時代です。例えば日本の刀職人が世界中で愛される刀を作っていれば、それは立派な国際的な活躍です。日本人はもともと大変勤勉で活動的ですので、日本だけではなく世界に目を向け、一步踏み出せば良いだけです。「国内人」「国際人」という明確な境界線はないと思います。

竹内 高橋先生は、国際的に活躍できる人材をどのように養成していきたいとお考えですか？

高橋 世界では「自分の意見を持っているか」が問われます。まずは自分の意見や見解を的確かつ堂々と表明できる人材を育成すること。日本人の苦手分野ですよ。その上で語学だけではなく、高い専門性・専門分野を持った人材を社会に送り出すことが、大学の責務だと考えています。

◆多様化への消極性に向き合うか

竹内 日本では少子高齢化などによる労働力不足を補うための政策として、技能実習生や移民を一定数受け入れています。しかし一方で、外国人や価値観の異なる人々に対する抵抗感も社会の中で広がっているようにも感じます。この状況をバックンさんはどのように分析していますか？

バックン 日本だけではなく多くの国で反移民の風が強まっているように感じます。社会の変化があまりにも急だと、それに対する反発が生まれるのは自然なこと。これまでも人種や性的マイノリティ、フェミニズムなどさまざまな社会的変化や活動を排除するような動きは繰り返し起きてきました。こういった反発のすべてを単純にヘイトととらえるべきではないと思っています。賛成か反対かの二項対立で語るのではなく、丁寧に対話を重ね、



◎国際部「Mi-Room」で学生たちと
エムアイルーム「Mi-Room (Multilingual Immersion Room)」は、異文化・国際交流を気軽に体験できるグローバル・コミュニケーションスペース。学生スタッフや教員による、さまざまな国の言語や文化セッションも実施しています。

多様性の魅力を取り入れることができたなら、日本はさらに豊かで面白い国になれると信じています。来日した外国人は、私が大好きな日本に興味を持ってきている存在。そう考えると自然とうれしい気持ちになります。世界中が自国以外の人種や文化に興味を持ち、相互に理解し合える。持続可能な共生への一歩として、こういった寛大さを人類全体で育てていけたら理想的ですね。

竹内 移民問題はさまざまな社会問題とも絡み合っています。多様な価値観を持つ人々と丁寧に対話しながら、これらの問題が大きくなっていくうちに解決していく。そういうことが必要な局面を日本は迎えていると感じています。国や文化を越えた交流は、自分自身だけでなく社会をも成長させる可能性を秘めています。学生たちには、異文化への興味と関心を持つことから始め、国際感覚を養い、柔軟な思考で社会問題を解決して欲しいですね。

高橋 ドイツでは「移民法」が2005年に施行され、移民への就職支援が法律で定められています。ドイツ語や職業訓練だけではなく習慣や制度まで学び、少子高齢化社会の労働力として期待されていますが、それでも反移民の動きは強まっています。背景にはその制度が十分に機能するほど、恩恵が国民全体にまで行き渡っていないことが原因だと言われています。そして自国民にとって重要なのは文化やルールの問題です。他国への移住を選ぶのならば、やはりその国の文化やルールを理解し、尊重する必要がありますね。

バックン 日本のルールは、外国人にとっては分かりづらい部分もありますね。

竹内 だからこそ理解してもらえるまで説明する・対話することが大切ですね。留学生と話す時にも「ここまで説明しなくても分かってくれるだろう」と思い込まず、背景まで丁寧に説明することで、結果的に文化の相互理解につながると感じています。

◆テンプレート教育を超え、正解のない問いに挑む

竹内 最後に学生の皆さんへメッセージをお願いします。
バックン 日本の若者たちにまず伝えたいのは「我慢し過ぎないでほしい」ということです。変えるべきだと必要性を感じたら、我慢せず勇気を持って変えましょう。英語で「Necessity is the mother of invention (必要は発明の母)」という言葉がありますが、「必要」だけでなく「願望」や「欲」もまた発明の原動力になります。我慢強さは美德でもありますが、日本の若者たちには、自分だけで抱え過ぎないでほしいと思います。

また今の日本の教育は、基礎学力や協調性など素晴らしい部分も多いですが、テンプレート通りに取り組めば正解にたどり着き、100点が取れてしまう教育だと感じています。社会に出ると正解



がない問題ばかりです。その中で高い成果やイノベーションを起こすためには、考える力・議論する力・自分の意見を持つ力が重要です。正解がない問題に向き合う力こそ、これからの教育に必要ではないでしょうか。

竹内 たしかに日本の教育では、先生が先に答えを用意していて、学生はその答えだけが正しいと信じて、それを当てようとするパターンがありますね。このようなパターンに慣れてしまうと、正解のない問題や課題を扱うのが苦手になってしまう。それは大きな問題です。OSIPの授業では、まさに正解のない社会課題に切り込んでいきます。100点満点ではなくても良い。その文脈において最適と考えられるソリューションにつながるようなコンセンサスをどう形成していくのか。このプロセスに学生たちは取り組んでいきます。

高橋 関西大学も大阪公立大学も、学生が挑戦できる環境は整っていますので、ぜひ大学を有効活用してほしいですね。こういった機会を自分からつかみ取っていくことで、世界中どこへ行っても活躍できる人物になってほしいと思っています。

竹内 OSIPを通して「エンパシー(相手の立場に立って考えられる力)」を身につけてほしいですね。価値観や視点の違いを恐れず話し合い、その違いを尊重・理解する「越境的思考回路」と「躊躇しない行動力」を備えた人材をOSIPから輩出していきたく考えています。

バックン 外国語を習得するのか、海外に移住するのか、国際人を目指すのか——この多様化する世界でどんな道を歩むのか、その選択は自由で、自分次第。専門性やスキルを身につけて、どんな場所や分野でも活躍できるという自信を持つことができたなら、きっとどの道を選んでも充実した人生を送ることができるでしょう。ぜひOSIPを最大限活用して、自分の可能性を広げてほしいと思います。

初監督作『禍禍女』に込めた思いと挑戦

「私らしく」の原点は、関大での出会い

●芸人(吉本興業所属)・映画監督
ゆりやんレトリィバァさん

—文学部 総合人文学科 映像文化専修 2013年卒業—

関西大学では私らしく生きることができた——。そう晴れやかな表情で語るのは、2026年2月6日に公開した映画『禍禍女』で初監督を務めた、卒業生のゆりやんレトリィバァさん。自身の恋愛経験を「ホラー」として昇華させた本作は、台北金馬映画祭(台湾)で日本人監督初となる「NETPAC賞」を受賞したほか、イタリアのモンスターズ・ファンタスティック映画祭で最優秀作品賞に輝くなど、海外の映画祭で「4冠」を達成。日本でも「ハラハラドキドキして、引き込まれる」「共感できる新時代の映画」などと大きな反響を呼んでいる。唯一無二の芸風を築き上げたゆりやんレトリィバァさんの「表現」の原点には、関西大学での「出会い」がある。映画製作に込めた思いと、学生時代の思い出、今後の夢についてじっくりと話を聞いた。

LEADERS NOW!



Story & Introduction : 『禍禍女』ストーリー&映画情報

好きになれたら、死ぬまで逃れられない——。執拗に男に付きまとう「禍禍女」の正体とは？ゆりやん監督自身の恋愛体験に基づいたという、妄想と狂気が交錯する混沌(カオス)が描かれた唯一無二のオリジナル映画。南沙良が主演を務め、ある男性に思いを寄せる美大生・上原早苗を演じる。共演には、前田旺志郎、アオイヤマダ、高石あかり、九条ジョー、鈴木福、前原瑞樹、平田敦子、平原テツ、斎藤工、田中麗奈ら豪華キャストがそろった。



©2026 K2 Pictures



■ゆりやんレトリィバァ 初映画監督作品『禍禍女』

【監督】：ゆりやんレトリィバァ
【脚本】：内藤瑛亮 【音楽】：yonkey
【企画・配給】：K2 Pictures

●「恋バナ」が「ホラー」映画に

——映画『禍禍女』を撮ろうと思ったきっかけを教えてください。
2021年頃に出演したテレビ番組で「次にやりたいことは何ですか？」と聞かれた時、「映画が好きなので、映画監督をやりたいです」と生意気なこと言いました。後に『禍禍女』のプロデューサーになる高橋大典さんが、たまたまその番組を見ていて、その日のうちに吉本興業に連絡をくださいました。

それから高橋さんと頻りに会って、どんな映画を製作するか話し合ったのですが、私が熱を持ってしゃべれることといたら、恋バナ(恋愛の話)。なので、高橋さんに会う度に、ずっと「恋バナ」をしていました。「こんなことがあって……」と過去の恋愛経験を話していたら、高橋さんが「それ、ホラーですね」と。「ホラー恋愛映画を作しましょう」ということになりました。

——完成した『禍禍女』を初めて見た時、どう思われましたか？
準備から撮影、編集、仕上げまで毎日現場で見ていたので、「こうなるんだ」という驚きより、「ついにできた」という思いでした。完成した作品を大きなスクリーンで見せてもらって、最後に自分の名前が「監督」とエンドロールに出た時にはやはり感動しましたね。



▲映画撮影のメイキングカット

●ただでは終わらせたくない

——「禍禍しい」は、辞書では「悪いことが起こりそう」という意味です。映画『禍禍女』には、ゆりやんさんの恋愛経験も反映されているのでしょうか？

高校生の時に好きな先輩がいました。そのA先輩は、いつも男子3人組で行動していて、B先輩、C先輩と一緒にいました。私は「A先輩、A先輩！」と追いかけてたけれど、振り向いてもらえなかったから、次と一緒にいたB先輩のことを好きになりました。そしたら、C先輩が「次は俺のことを好きになるんじゃないか」って、勝手に怖がっていました。

「ゆりやんに、好きになれたら終わり」と思われて、「勝手に怖がられていた」という私の経験が『禍禍女』のベースです。あと、私が好きな人に言われてきた言葉も、登場人物のセリフに入っています。主人公の上原早苗(演：南沙良)が、「好き」という気持ちをアピールする方法が分からず、とにかく「好き」と言うことが愛情表現だと思っているところにも、自分の経験を乗せています。

ドラマ『極悪女王』で共演した斎藤工さんにも霊媒師役で『禍禍女』に出演していただきましたが、私がプライベートで工さんに勝手に興味を持っていて……。でも、私には全く興味を持ってくれなかったから、映画に出ていただいて、復讐というか、映画の中で痛い目に遭ってもらいました(笑)

『禍禍女』は、「私の恋愛を詰め込んだホラー映画」です。恋愛は2人ですものなので、よく考えたら私の経験は恋愛というより

ただの恋、片思いばかりですね。でも、ただでは終わりにしたくない、それが原動力となって映画に昇華させることができました。

●自分の意見を「研ぎ澄ます」

——映画を製作する過程で、印象に残っていることはありますか？
映画のプロフェッショナルが集まる現場で、自分の意見を遠慮せず伝えるということには、勇気が必要でした。最初から自分の我を通すのではなく、皆の意見をまずはしっかり吸収する。その上で「自分がどう表現したいか」を伝えるという過程を大切にしていました。また、自分自身が何を求めているのか、深く考え続けました。「自分は何が好きか」「自分って何者なのか」という問いを突き詰めて、自分の感性を研ぎ澄ます期間にもなりましたね。——『禍禍女』で思い入れのあるシーンを教えてください。

鈴木福さんに高校生役で出演していただいた、冒頭のシーンです。私はホラー映画『学校の怪談』が好きで、子供の頃に映画館で見た思い出が、大人になった今も心に残っています。そういう経験から、『禍禍女』も「怪談」っぽいスタートにして、次世代の方の心に残る映画にしたいなと思いました。

あとは、早苗の部屋にある増村宏(演：前田旺志郎)の大きな顔のオブジェが映るシーンです。ミュージカルのようなシーンが終わった後に、どんなシーンを続けるか。行き詰まった時にひらめいたアイデアを現場で口にしたら、「それだ！」となって。苦し紛れのアイデアだったんですけど、自分らしい表現でお気に入りのシーンです。

LEADERS NOW!



Film Festival & Award: 台北金馬映画祭「NETPAC賞」受賞



上映後のQ&Aの様子



©金馬影展執委會 Taipei Golden Horse Film Festival

●好きな人に振り向いてもらいたい

——ゆりやんさんが関大に進学したきっかけを教えてください。

好きな人に振り向いてもらいたいとか、好きな人の目に留まりたいとか——。私は、「好きな人にすごいと思ってもらいたい」という気持ちが原動力になるタイプです。その原動力で勉強を頑張って、関大に入学することができました。

高校時代に1学年下の野球部員のことを好きになったんですが、振り向いてもらえなくて。夏休み中もずっと野球部の練習が見える外のベンチで、勉強をしている「ふり」をして眺めていたんです。でも、夏休みが終わったら別の子と付き合っていることを知って。「私の夏休み、何やったん?」という思いが込み上げてきました。それで「じゃあ大学に行って、その彼にすごい、賢いと思ってもらおう!」と勉強を頑張りました。

芸人を目指していたので、もともと大学に行くつもりはなかったんです。だから、その子に恋したおかげで勉強を頑張り、関大に入学することができたので、今では感謝しています。

●映像文化専修のゼミでの出会い

——関大時代の学びで、今の活動に影響したことはありますか?

全部影響しています! 関大に行っていなかったら、『禍禍女』は生まれていません。高校を卒業してすぐに芸人にならずに、関大で学生生活を過ごすことができて本当に良かったと思っています。

当時から芸人になるつもりだったので、「大学では好きなことを勉強したい」と考えていました。ちょうど外国語学部が開設された年で迷ったのですが、文学部に映像文化専修があって「授業でも映画をめっちゃ見ることができる」と聞いて選びました。今では、ビジ

ネスを学ぶことができる経済学部か商学部にも興味がありますね。

映像文化専修の堀潤之先生のゼミでは、幅広いジャンルの映画に触れることができました。「金曜ロードショー」で放映されるような有名な映画はよく見ていたんですけど、今まで知らなかった映画とも数多く出会うことができ、「こんな作品もあるんだ」という発見を重ねる中で、自分が好きな映画・ジャンルにもたどり着きました。

ゼミ・授業以外でも、奈良の実家から片道3時間かけて通っていたので、往復の電車では、ポータブルプレイヤーでひたすら映画を見ていました。



▲関大ストリートダンスサークルの仲間たちと



▲卒業式にて

また、関大で出会った友達の影響で芸風、「今の自分」が形成されています。関大では、帰国子女や留学経験のある友達がたくさんきて、英語と触れ合う機会が多かったからです。また、ストリートダンスサークル「Soul Beat Crew」にも入っていたのですが、皆「ゆりやん、ゆりやん」と声を掛けてくれて優しくて。良い仲間に出会うことができ、関大では自分が認められていると前向きになれましたね。広くてきれいなキャンパスで、私らしく生きることができた環境でした。



皆の個性を信じて、そのアイデンティティをしっかりと形にしたことが、私たちだけの、どこにもない、唯一無二の表現につながったのではないかと思います。誰かになろうとしないところが、良かったのかもしれない。

——『禍禍女』は、アメリカ最大規模のジャンル映画祭「Beyond Fest」に正式出品されるなど、多くの海外映画祭へ参加しています。また、台北金馬映画祭で日本人監督初となる「NETPAC賞」を受賞するなど、海外の映画祭で4冠を達成しました。

世界を回る中で、あこがれの監督に会うことができたり、ハリウッドの歴史的映画館「グローマンズ・エジプシャン・シアター」でワールドプレミア(世界初公開)をさせてもらったり。冷静に考えたら、すごいことになっています。人ごとに思えるほど、びっくりしています。

『禍禍女』は、私が監督をしましたが、皆が作ってくれた映画です。皆の個性を信じて、そのアイデンティティをしっかりと形にしたことが、私たちだけの、どこにもない、唯一無二の表現につながったのではないかと思います。誰かになろうとしないところが、良かったのかもしれない。

●関大卒業生とつくる新しい世界

——今後の目標を聞かせてください。

肩書きを増やしたいです。何かの選手とか教授とか……関西大学の客員教授にもなりたいです(笑)。教壇の上に立ってみたいですね。『禍禍女』のPRイベントで、『禍禍CAR』というピンク色の選挙風の街宣車を作って全国を回ったのですが、車の台の上に登って、「どうやったら両思いになるのでしょうか!! どうですか、皆さん!」と演説させてもらったことが楽しくて。目標は、七変化の能力を持つキューティーハニーになることです(笑)



映画のPRイベントで

ゆりやんレトリィバァ(吉田有里)——よしだゆり

■1990年奈良県生まれ。奈良県立高田高等学校、2013年関西大学文学部映像文化専修卒業。大学在学中に吉本総合芸能学院(NSC)の35期生として入学。「NSC大ライブ2013」で優勝し、首席で卒業。2017年、女芸人No.1決定戦「THE WJ」第1回大会で優勝。2019年にはアメリカのオーディション番組「アメリカズ・ゴット・タレント」に挑戦し、注目を集める。2021年、R-1グランプリ優勝。Netflixドラマ「極悪女王」で主演を務めるなど、女優としても活躍の場を広げ、その他にもアーティスト活動や、トレーニングウェア「YURYUR(ユーユー)」のディレクションなど幅広く活躍中。2024年に活動拠点をアメリカに移す。



アメリカで精力的に活動しているゆりやんさん。ロサンゼルス・ハリウッドのスタンダップコメディクラブ「ラフ・ファクトリー」で単独ライブも開催

——関西大学出身の芸人さんも多いですね。最後に、関西大学の後輩たちにメッセージをお願いします。

やはり桂文枝師匠が関大在学中に、「落語大学」(落語研究会)をつくられたことが大きいのではないのでしょうか。卒業してからも、関大の卒業生と出会う機会が多いんです。芸人ではジャルジャルさんをはじめ、同じ業界(芸能界)の人も多くですし、違う業界の人とも、同じ関大出身だと分かると話が弾みます。関大卒業生や在学の方たちと、また新しい世界をつくっていけることを楽しみにしています。

関大は勢いがあって、卒業した今でも、私の中では一番イケてる大学です。関大の卒業生であることを、本当に誇りに思っています!

LEADERS NOW!



女性の人生に寄り添う産婦人科医

国際協力活動を経て、37歳で医師に転身

●レディースクリニック サンタクルス ザ シンサイバシ院長
藤田 由布 さん —総合情報学部 1998年卒業—

大学卒業後、アフリカでの青年海外協力隊員をはじめとするさまざまな国際協力活動を経て、ハンガリーの国立大学医学部でEU医師免許を取得。現在は大阪の産婦人科クリニックで院長として診療を行う傍ら、「婦人科漫談セミナー」で全国を駆け回っている藤田由布さん。多彩な経歴の背景にある、バイタリティあふれる人生の原動力に迫る――。



藤田 由布—ふじた ゆう
■大阪府生まれ。1998年関西大学総合情報学部卒業。卒業後は青年海外協力隊としてアフリカ・ニジェールで感染症対策活動に取り組む。JICAなどで国際協力に携わりながら、イギリス・ロンドン大学大学院にてヘルスプロモーション修士号を取得。ハンガリー国立デブレツェン大学医学部にてEU医師免許、帰国後に日本医師免許も取得し産婦人科医に。現在は「レディースクリニック サンタクルス ザ シンサイバシ」で院長を務める。

▲総合情報学部生時代の教員だった同田朋之教授、同級生の岩崎千晶教授と大阪・関西万博を訪問

●アフリカでの活動中に芽生えた医療への思い

得意の英語を生かして高校時代にアメリカ・インディアナ州へ留学した経験もある藤田さん。帰国後は、「情報やコミュニケーションを学ぶ、面白そうな学部だ」と当時関西大学に新設された総合情報学部へ58倍の競争率をくぐり抜けて入学。情報学やメディア制作を学び、同学部主催の学園祭の実行委員長も務めるなど学生生活を謳歌する一方で、青年海外協力隊への参加を常に考えていた。子供の頃から海外のニュースに触れる度、将来は開発途上国で支援活動がしたいという思いを抱えていたからだ。



1995年に開催された関西大学統一学園祭のパフレット▶総合情報学部主催の学園祭では実行委員長を務めた

◀学部生時代、高槻キャンパスで友人たちと

そんな藤田さんにゼミの指導教員が教えてくれたのは、特定の地域やコミュニティに根差した情報伝達手段をメディアととらえる「フォーク・メディア」という概念。卒業後すぐに青年海外協力隊として派遣されたアフリカ・ニジェールでの活動には、この考え方が生かされたという。

藤田さんは寄生虫ギニアワームの感染症撲滅を目的に、視覚や聴覚を刺激して学習効果を高める視聴覚教育を担当。「電気がない奥地で当時はデジタルカメラもない時代。衛生教育や感染症対策の教材には紙芝居や演劇など、どの手段が現地の情報伝達に有効なのかを模索する中で大学時代の学びが役に立ちました」。

ニジェールでの活動中には今まで知らなかった多くの病にも遭遇。「人ってこんなにも簡単に死んでしまうんだ」とショックを受けた。若年層の妊婦死亡率は高く、出産中に亡くなることもあったという。生と死が隣り合わせの女性たちを見て、医療技術のない自分の無力さを痛感。今まで考えていなかった医療に携わりたいという気持ちが芽生えたのはこの頃だった。



▲藤田さんが住んでいたニジェール奥地の村で稗(ひえ)の収穫の時、子供たちと一緒に(1998年)

●「医師になる」強い思い込みが最大の原動力

青年海外協力隊の任期終了後10年近くは、経験を生かしてJICA(国際協力機構)など国際協力に関する仕事で奔走。医学部進学のための学費を貯める目的でもあったが、「早く医師になりたい」という思いが頭の片隅から離れずもやもやしていた。

ようやく医学部へ進学した時には32歳に。卒業後は海外で働くつもりだからと日本よりも学費を抑えられるハンガリーの国立デブレツェン大学に入学した。



▲ハンガリー国立デブレツェン大学医学部の卒業式(2014年6月)

医学部時代に一番大変だったことは、日本にはない口頭試験。「100枚ほどのカードの中からくじ引きで試験テーマが決まり、教授陣に囲まれて矢継ぎ早に質問攻めで、即座に答えなければ不合格。それが6年間続くので、精神的にも大変でした」。同級生は15歳ほど年下ばかりで友人も少なく、生活費を切り詰めて白米に塩だけという食事の日も。今も、「あの6年間にだけは戻りたくない!」と思うほどの過酷な状況だった。

そんな孤独でつらい時期に、原動力となったのは「思い込み」。「私は良くも悪くも人より少し思い込みが強かった(笑)。「医師になりたい」じゃなく「医師になる」という思い込みの強さは人一倍あったんです」。

その「思い込み」の強さでひたすら勉強に没頭し、医学部をストレートで卒業後、ヨーロッパの医師免許を取得。そのまま海外で働くつもりだったが、外国で学んでいる間に何度も尋ねられた「日本の医療はどう?」の問い掛けに答えられず、日本人として母国の医療をしっかりと知っておくべきという考えが芽生え日本に一旦戻ることになった。

●関西大学での学びを生かし日本の女性たちを救う!

帰国後にまず直面したのが、日本の女性が日々我慢しているという事実。「女性のライフステージはダイナミックに変わっていきます。思春期から生理痛、その後妊娠・出産もあって、年を重ねれば更年期……なのに日本の女性たちはどのタイミングでも我慢しなきゃならない環境の人が多く知って、怒りのような違和感が湧きました。私にも何かできるんじゃないかと初期研修を経て産婦人科を選んだんです」。

働き始めてさらに感じたのは、来院する女性たちが自身の体に起きることや予防に関する知識が少ないということ。けれどこれは「知らない」のではなく、「知らされていない」ことが問題だと藤田さんは考えている。

「生理痛の対策や子宮頸がんワクチン、性感染症、緊急避妊ピル……大切なことなのに学校ではほとんど教えない。加えて診察には体調が悪くなった人しかやって来てくれない。それなら私から話しに行こう! って思いました」。

ずいぶん遠回りしているようだけど、いろんな景色を見てきたことが人生を豊かにしたし、今の自分の診療にもつながっているように思いますね。



2021年から「婦人科漫談セミナー」と銘打って北海道から九州まで積極的に足を運んでいる。理解を深めてもらうには視覚化が大事なカギになると考え、興味が湧くよう工夫を凝らしたスライドを自作している。

セミナーは好評で既に150回を超えたが、次のステップとして今の時代に合ったショート動画でより多くの人にアプローチする方法を現在企画中なのだとか。「セミナーのスライドを自分で作れるのも、動画を作ろうと思いつくのも、きっと関西大学で情報学についていろいろなノウハウを学んだおかげですね。国内に約1万人いる産婦人科医の中で、こんなことを考え付くのは私だけかもしれません(笑)」。



◀関西大学で「婦人科漫談セミナー」の講演を行う藤田さん

●いろいろな経験が今の自分の診療に生きている

将来は、当初の目標だった海外での医療にも携わりたいと考える時、ニジェールの地を思い出すことも。母国語以外に3言語を操る藤田さんだが、ニジェールの言語「ハウサ語」で好きなことわざは「Rigakafi ya fi magani」(予防は薬よりも強い)。ロンドン大学大学院ではヘルスケアプロモーション修士号を取得し、予防についても知識があるため、予防と治療の両面から医療に携わることができるのが自分の強みの一つだと話す。

「アフリカでの経験、国際協力活動でのさまざまな海外経験、そして関西大学で学んだ経験。ずいぶん遠回りしているようだけど、いろんな景色を見てきたことが人生を豊かにしたし、今の自分の診療にもつながっているように思いますね」。

つらかった医学部時代に心の支えだった医師の國井修先生の言葉を学生に贈りたいという。「ひとの夢は単純で単純なほうがいい。思い込みが強ければ強いほど、ひとを動かす力も強い。どんな人生にも何らかの「縛り」や「制限」があるけれど、むしろこの制限の中で学ぶ事が多い。回り道をする事で違った世界を見て、人生に楽しみやゆとりが増えることもある」。多くの経験を重ねた藤田さんの人生には、無駄な道のりは一つもなかったのだろう。

夢へのルートは一つじゃない

目標に向き合い続けて開いた空への扉

●全日本空輸株式会社 運航乗務員
酒井 雄生 さん
—政策創造学部 2018年卒業—

航空機のパイロットになるという子供の頃からの夢を叶え、国内線にとどまらず、東アジアや東南アジアへも翼を広げ、充実した日々を送る酒井雄生さん。「毎回、乗務できる幸せを噛みしめながら仕事をしています。このインタビューをきっかけに、パイロットを目指す関大生が増えたらうれしいですね」。爽やかな表情でそう語る酒井さんの道のりは、決して一直線ではなかった。



酒井 雄生 —さかい ゆうき
■1993年和歌山県生まれ。2018年関西大学政策創造学部卒業。在学中は体育会硬式野球部に所属。卒業後、航空大学校へ入学し2年10カ月の訓練を修了。2021年に全日本空輸株式会社(ANA)へ入社。現在は運航乗務員としてボーイング767型機を担当。2026年3月からのボーイング787型機訓練を経て、長距離路線での乗務を目指す。

「目標に対して真摯に向き合い、やり切る姿勢が身につきましたし、夢中になれるものがあって幸せでした。無駄な時間は一つもありません。」

●野球で完全燃焼し、再び空への夢が動き出す

「パイロットにあこがれたきっかけは、テレビドラマ『GOOD LUCK!!』でした。小学生の頃、画面の中で操縦桿を握り、大きな飛行機を飛ばす姿に心を奪われた。「今見るとパイロットの仕事が忠実に再現されていて、自分自身のモチベーションの源かもしれない」と話す。ただ当時は、本当にパイロットになれるとは思っていなかった。

その頃、酒井少年の胸を占めていたのは「甲子園に出場する」という、もう一つの大きな夢だ。小学生の頃から野球漬けで、高校では投手として白球を追う日々。一学年上の先輩は甲子園出場を果たしたが、自分たちの代は目前で夢破れた。高校2年生の時、校内の職業セミナーでパイロットとして働く卒業生から矯正視力でもパイロットになれることを聞いた。「その日に書店へ行き、参考書を買いました」。夢は、そこで明確な目標へと変わった。

高校卒業後にパイロットを目指すには、私立大学のパイロット養成コースに進むか、大学に2年以上在学してから航空大学校を受験する方法がある。しかし酒井さんは最短ルートを選ばなかった。「野球に区切りをつけてから、前に進みたかったんです」。不完全燃焼に終わった高校野球への情熱を燃やし尽くしたい思いで、関西大学へ進学することに。英語力向上を重視し、「プロ



▲関西大学野球部の仲間たちと



▲関西大学野球部時代、力強い投球を見せた酒井さん



LEADERS NOW!

航空大学校のフライト訓練機「シーラス式SR22型」



入社3年目、B767型機で初めて乗客を乗せて乗務した羽田発長崎行きフライト終わりに機長と

ファッション英語」が履修できる政策創造学部を選んだ。

入学後は野球部の練習に打ち込む傍ら、パイロットになるための準備も怠らなかった。TOEICスコアは600点弱から820点へ大幅に伸びた。野球ではケガもありレギュラーの座はつかめなかったが「4年間やり切ったので悔いはありません」と清々しく振り返る。そして「今のパイロットとしての仕事の取り組み方や日々の過ごし方は、間違いなく関大野球部の経験が基礎になっています」と酒井さんは強調する。

●就職活動と受験勉強を乗り越え、高め合える仲間との出会い

就職活動を始めたのは、3年次の秋。パイロットの自社養成制度がある航空会社への就職活動に注力したが、狭き門で不採用に。「正直、しばらく引きずりました」。残るは、航空大学校に進学し、必要な資格を取得してから航空会社へ就職する道。しかし航空大学校の受験には不得意な理数系科目も含まれ、シフトチェンジは一筋縄ではいかなかった。「働きながらでは中途半端になる」と他の企業にも就職はせず、新卒資格を保持するため、大学を休学して航空大学校の受験勉強に専念。勉強は孤独だったが関大の仲間の支えもあり、受験資格の上限年齢である24歳で合格を手にした。「やっとなスタートラインに立てた」。



▲(左)航空大学校で共に厳しい訓練を乗り越えた同期生たちと / (右) 仙台分校で挙行了された卒業式

航空大学校では、約2年間で実技と座学を通して操縦や専門知識を学び、3種類の国家資格試験に合格する必要がある。2度不合格になれば退学という厳しい環境だ。「過密なスケジュールで数々の課題や試験をクリアしないとイケない。それまでにないプレッシャーでした」と苦笑する。

それでも「楽しかった」と言い切れるのは、共に切磋琢磨した仲間の存在があってこそ。宮崎、帯広、仙台と、空港に隣接した施設で



半年ずつ学び、寮生活を送りながら互いを高め合った。休日には土地の食や温泉で英気を養う。苦手科目の物理も克服し、すべての資格を取得して無事に卒業。そして、コロナ禍で就職環境が不安視される中、2021年に第1志望のANAへの入社が決まった。

●大切にしているのは「準備と情報収集」

入社後、初年度は羽田空港で地上勤務をし、その後パイロットとして約10カ月の訓練を経てついに旅客機の操縦席へ。3度目のフライトに両親を招待した。「良い思い出になったと喜んでくれました」と目を細める。

現在は国内線だけでなく国際線にも乗務し、副操縦士として経験を積む。国内線は日本特有の山地の影響で不安定になった気流の中での着陸操作や、変化の大きい気象状況下での運航、市街地近郊の空港への着陸などの課題がある。一方、国際線は多様な機材が行き交う大規模空港での安全な操縦や、長距離フライト中の緊急対応といった点で難しさがあるという。安全性や定時性はもちろん、揺れの軽減など乗客の快適性も追求する。それらを実現するために酒井さんが最も大切にしているのは「準備と情報収集」。天候や高度、客室サービスに至るまで細かく想定し、シミュレーションを重ねる。「空の上では、刻々と変化する気象条件をいち早く察知し、常に先を読んだ判断が求められます。安全で質の高いフライトを提供するために、準備は欠かせません」。

●最高のキャプテンを目指して

パイロットになるために、大学生活は「遠回り」ではなかったのか。その問いを、酒井さんは即座に否定する。「目標に対して真摯に向き合い、やり切る姿勢が身につきましたし、夢中になれるものがあって幸せでした。無駄な時間は一つもありません」。

次なる目標は、機長への昇格だ。機長はフライト全体の責任を負い、最終判断を下す存在。酒井さんは、その姿を野球のピッチャーに重ねる。「機長も投手も、チーム全員の思いを受け継ぎ、最後にその責任を果たすポジション。飛行機に初めて乗られる方や飛行機に乗ることが苦手な方にも常に寄り添い、乗客の皆さまに安心していただけるフライトをつくり上げることができる、そんなキャプテンになりたいですね」。目標に向けた視界は良好だ。

東南アジア留学が 広げた学びの視野

—世界の多様な価値観との出会いが
未来を形づくる原動力に

●経済学部 3年次生 渡部 朔土さん

国際的視野で経済を学びたいと、ベトナムやマレーシアへ留学した渡部さん。現在はその経験を生かして、自分と同じように留学を目指す関大生たちのサポートをさまざまな形でやっている。キャンパス内にある異文化コミュニケーションを体験できる学習スペース「Mi-Room^{※1}」で、留学の体験談やサポート活動の話聞いた。



渡部 朔土—わたなべ さくじ

■2004年大阪府生まれ。大阪府立刀根山高等学校卒業。GDP成長率の高い東南アジアに興味を持ち、現地で経済を学ぶためにベトナム、マレーシアへ留学。帰国後は学生留学アドバイザー「SAPA」として関大生の留学実現をサポート。「Mi-Room」の学生スタッフとしても活躍中。



▲ブトラジャヤのベルダナ・ブトラとともに

は初の留学生となる。国際部で情報収集を続け、GPAやIELTSなど留学に必要な学力や英語力をレベルアップし、書類審査と面接試験を無事にクリアして旅立ったのは2年次生の2月。

約半年間の学びは刺激的なことばかり。自分の意見を形成する過程にAIを取り入れるなど、新たな学びの視点も多かったそう。

渡部さんが経済に興味を持ったきっかけは、高校時代に見た株式市場のニュースだった。コロナ禍での経済不況による株価への影響など、世界的な動きをネットや新聞を通じて自分でも調べ、大学は経済学部を目指した。経済以外にも関心が広がる可能性があったため、興味や目標に合わせて、体系的に学ぶことができるカリキュラムに魅力を感じて関西大学へ進学。入学後にはGDP成長率が高い東南アジアに注目し、1年次生の冬には海外研修プログラムでベトナムのFPT大学に短期留学した。

留学中、特に驚いたのは共に学んだ現地学生たちのレベルの高さだった。「日本と同じ第二言語の英語を、皆が流暢に話す。授業でのプレゼンテーションも完成度が高かった。片言の英語が精一杯だった僕はあまりの実力の差に衝撃を受けました。その時、海外のトップ大学に留学することを目標にしたんです」。

渡部さんの志望大学は、多国籍の人種が集まるマレーシア最難関のマラヤ大学。合格すれば関西大学からは

LEADERS NOW!



▲ヌグリ・スンビラン州のモスク前で



▲マラヤ大学のゲート前で伝統衣装を着て



▲マラヤ大学の講義風景



▲マレーシアの「ロティ・ティッシュ」と呼ばれる独特な菓子

現地の友人もできて、イスラム教のラマダン明けの祭りであるハリラヤや、友人のいとこの結婚式にも招待されるなど、異なる文化や慣習に接する貴重な経験になった。

帰国後は、留学を目指す関大生をサポートするスタッフ「SAPA^{※2}」として、学内の留学相談会などイベントにも参加している。志望する海外大学へ留学したことのあるアドバイザーに個別で質問できるのも好評だ。

また、日本の学生が留学生と気軽に交流できるスペース「Mi-Room」の学生スタッフ「GTA^{※3}」として、カウンター対応や国際交流イベントの企画・運営を担当している。「留学の情報収集ができて、各国の多様な価値観を持つ人たちと出会える場所です。GTAである僕自身も視野が広がり、日本にいながら世界各国の友人ができたことも意義深いですね」。

一方で、国際経済コースゼミの授業にも熱心に取り組む。留学経験がある学生や交換留学生も多く在籍するため、プレゼンテーションはすべて英語で行うほか、各国の暮らしに密着したリアルな経済について知ることもでき、毎回新鮮な気持ちで臨んでいる。

マレーシア留学で現地の環境問題に興味を持ち、帰国後には環境社会検定試験(通称:eco検定)にも挑戦した渡部さん。将来はその知識を生かしてESG投資などに関連した海外での仕事がしたいと考えているそう。「いろいろな国に駐在することで、仕事を通してその国の文化などに触れられる刺激的な働き方がしたいです」。

※1 Mi-Room=Multilingual Immersion Room
千里山キャンパス第2学舎にある国際交流を体験できるコミュニケーション・スペース。留学生や留学経験者との交流ができ、定期的にイベントも開催される。また、主に留学生による各国の文化や言語を学ぶさまざまなセッションが開催されている。

※2 SAPA=Study Abroad Peer Advisor
関大生の留学実現をサポートする学生留学アドバイザー。留学希望の学生は留学経験者であるSAPAにさまざまな質問や不安について相談できる。

※3 GTA=Global Teaching Assistant
Mi-Roomの学生運営補助スタッフ。国際交流や世界の言語・文化に興味がある学生が多く、積極的にMi-Roomの運営を支えている。

音楽のような美しい日本語の 響きに魅せられて

—日本の文化と言語を愛し、
言葉の力で未来を切り拓く

●文学部 2年次生 マスード・アフアフさん

日頃から日本の小説を愛読し、今では母国の言葉よりも自然に出てくるといほど流暢に日本語を使いこなす留学生のマスード・アフアフさん。故郷から遠く離れた“日本”という国に惹かれ、将来はこの国で働きたいという夢を叶えるために今も猛勉強中だ。



▲国語辞典を一冊の本のように読むマスードさん



▲大阪・関西万博にボランティアで参加

「初めて耳にした日本語は、美しい音楽のようでした」と話すUAEからの留学生マスード・アフアフさん。物心ついた頃から姉と一緒に日本のアニメやドキュメンタリー番組を見ていたことから日本語に興味を持った。しかし地元で日本語学校はなく、独学で勉強を開始。辞書で言語の知識を増やし、文章の勉強には小説や好きな日本人アーティストのインタビューを教材にしたという。

高校卒業後、念願叶って渡日し、最初の1年間は大学進学を目指して日本語学校で学んだ。そこで教員から「小説家になりたいという夢があるのなら、さらに高い目標を目指すべきだ」と励まされ、進学先を探す中で出会ったのが関西大学だった。幅広いカリキュラムや成績優秀者への表彰制度などに魅力を感じたことに加え、実際に千里山キャンパスへ足を運んだ際には、まるで森を歩くような緑の豊かさにも惹かれたという。「UAEには、こんなに自然に恵まれた大学はありません。心癒やされながら学べる環境は理想的だと感じました」。

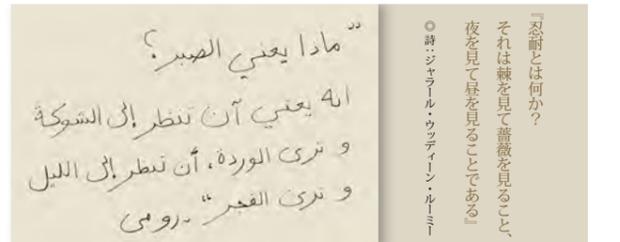
現在は文学部の2年次生。授業はすべて日本語で行われるため最初は苦戦もしたが、今は無理なく楽しみながら受講できるようになった。大学受験の面接で「この先生の授業を受けたい!」と感じた、国語学の森勇太教授ゼミにも熱心に通う。「日本語の変遷を学んだり用例採集を用いて単語を分析したりと、自分がやりたかった“日本語をより深く学ぶ”ことができて、これ以上ない幸せです」。今後はビジネスや経済、健康・スポーツに関する授業など新たな分野も学びたいと意欲的だ。また学業以外にも、日本の高校生に英語翻訳の添削指導をし、大阪・関西万博では「ひょうごフィールドパビリオン」の物産展でボランティアスタッフとして勤務するなど、アクティブに過ごしている。



愛読書の「舟を編む」(三浦しをん 著)

マスード・アフアフ
■アラブ首長国連邦(UAE)アブダビ出身。自国では辞書や小説などを駆使して独学で日本語を習得。地元の高校Indian School Al-Ainを卒業後、来日してECC日本語学院神戸校へ1年間通い、2024年に関西大学文学部へ正規留学生として入学。現在は念願だった国語学ゼミに所属し、日本語の理解をより深める毎日を送る。

好きな言葉は、13世紀の神秘主義詩人、ジャラルール・ウッディーン・ルーミーの「忍耐とは何か?それは棘を見て薔薇を見ること、夜を見て昼を見ることである」。「忍耐とはじっと座って待つことではなく、その先を見越すことだ」という意味です。高校卒業後は経済的な理由から留学もすぐには叶いませんでした。それでもあきらめずにいられたのは、この言葉が私の心を支えてくれたから。そのおかげで今の私があります」。



▲大好きなルーミーの詩の一文(マスードさん自筆)

帰国しても母語のウルドゥー語がスムーズに出ない時もあるほど、今では日本語が馴染んでいる。「昔はコミュニケーションが少し苦手でしたが、日本語なら話したいことも表現しやすく、積極的に話せるようになりました。日本語に出会えて本当によかったです。将来は翻訳家として働きながら、日本語の小説を書くのが夢です」。

母国で満月の夜によく行く近所の砂漠(右端がマスードさん)▶





■研究最前線

文化人類学の研究 • Research in Cultural Anthropology

アフリカ島嶼国カーボヴェルデでクレオール文化を研究

— 初監督映画が「東京ドキュメンタリー映画祭」ダブル受賞

Studying Creole Culture in Cabo Verde, an African Island Nation

Directorial Debut Wins Two Awards at the Tokyo Documentary Film Festival

◎文学部 青木 敬 准教授

• Faculty of Letters — Associate Professor *Kay Aoki*



▲フォゴ島にそびえる火山ピコ・ド・フォゴ
The Pico do Fogo volcano towering over Fogo Island

西アフリカ沖に浮かぶ島嶼国家——カーボヴェルデ共和国。2023年のバスケットボールW杯での対戦や2026年のサッカーW杯初出場国として日本でも注目を集めている。カーボヴェルデは15世紀からポルトガルの植民地だったが、1975年に独立。かつては大西洋奴隷貿易の拠点で、アフリカとヨーロッパの文化が混ざり合った「クレオール文化」が特徴だ。

文化人類学の視点でこの島国を研究してきた青木敬准教授は、12年間撮り続けた記録をもとに、ドキュメンタリー・民族誌映画「カルロスのレシビ(Rhythms of Sodade)」を制作。2025年の「東京ドキュメンタリー映画祭」人類学・民俗映像部門で準グランプリと観客賞のダブル受賞を果たした。

The Republic of Cabo Verde is an island nation off the coast of West Africa. The country has been gaining attention in Japan as an opponent at the 2023 FIBA Basketball World Cup and as a first-time qualifier for the 2026 FIFA World Cup. Cabo Verde was a Portuguese colony from the 15th century until it gained independence in 1975. Once a hub of the Atlantic slave trade, the country is defined by its "Creole culture," a fusion of African and European traditions.

Associate Professor Kay Aoki, who has studied the island nation through the lens of cultural anthropology, drew on 12 years of footage to produce the documentary ethnographic film "Rhythms of Sodade." The film won both the Runner-Up Grand Prix and the Audience Award in the Visual Anthropology and Ethnographic Film Competition at the 2025 Tokyo Documentary Film Festival.



現地に溶け込み、対話を深める

— 専門分野について教えてください。

研究分野は文化人類学で、世界各地でのフィールドワークを通して、その地域の民族や文化を調査・研究し、「人間とは何か」という根源的な問いを探求する学問です。私は西アフリカの島嶼国カーボヴェルデの「クレオール文化」を中心に研究しています。クレオールとは、単に複数の文化が混ざった状態を指す言葉ではありません。植民地支配、奴隷制、移民といった歴史の中で、人々が生き延びるために編み出してきた生活様式や価値観の総体を指す概念です。カーボヴェルデは、こうしたクレオール文化が世界で最も早い時期に形成された場所の一つとして知られています。私の関心は、ポルトガル語を基盤とするクレオール語に端を発しましたが、やがて音楽、料理、語りといった日常実践へと広がっていきました。中でも、カーボヴェルデの伝統音楽「モルナ」は、歴史や記憶、感情が凝縮された表現として、私の研究の重要な軸になっています。現在は、モルナを含むさまざまな実践を手掛かりに、クレオール文化全体を総合的にとらえる研究を行っています。

私のフィールドワークは、現地の人々と生活を共にし、時間を重ねることから始まります。かつては、研究者は対象から距離を取り、介入せずに観察すべきだと考えられてきましたが、現在ではそのような「中立的な観察者」という立場そのものが問い直されています。私は、調査とは情報を集める作業ではなく、他者との関係が立ち上がっていく場に身を置くことだと考えています。フィールドワークでの経験は、自分が当たり前だと思っていた世界の見え方を揺さぶり、組み替えていきます。その変化のプロセスを引き受けながら、人間のあり方を問い直していくこと。それが、私にとっての文化人類学です。

— なぜカーボヴェルデに関心を持ったのでしょうか？

父が日本人で母がイギリス人なのですが、家庭内ではフランス語を使って育ちました。父はフランス語の言語学者で、私が大学で新しい言語を学びたいと考えていた頃、「ブラジルはBRICSの一角を占める国だから、ポルトガル語を学べば世界が広がる」と勧められ、ポルトガル語を専攻しました。また、幼少期に住んでいたフランスではアフリカ系移民の友人が多く、母からクレオール文化の話聞く機会もありました。そうした経験が重なり、カーボヴェルデという国に自然と惹かれていきました。

フランス語、日本語、英語に囲まれて育ち、言語やアイデンティティの揺らぎを感じてきた自分自身の経験とも重なり、「クレオールとは自分の人生そのものだ」と感じたことが、現在の研究につながっています。

■ Immersing in the Community, Deepening the Dialogue

— Tell us about your field of specialization.

My field is cultural anthropology, a discipline that investigates peoples and cultures around the world through fieldwork, exploring the fundamental question of what it means to be human. My research centers on the "Creole culture" of Cabo Verde, an island nation in West Africa. Creole doesn't simply refer to a blend of multiple cultures. It's a concept that encompasses the entire body of lifestyles and values that people forged in order to survive under colonial rule, slavery, and migration. Cabo Verde is known as one of the earliest places in the world where this kind of Creole culture took shape. My interest began with the Portuguese-based Creole language but gradually expanded into everyday practices like music, cooking, and storytelling. Among these, Cabo Verde's traditional music called "morna" has become a central pillar of my research as a form of expression that distills history, memory, and emotion. I'm currently working to build a comprehensive understanding of Creole culture as a whole, using "morna" and other practices as points of entry.

My fieldwork begins by living alongside local people and spending extended time with them. It was once believed that researchers should maintain distance from their subjects and observe without intervention, but today the very notion of the "neutral observer" is being challenged. I see fieldwork not as a process of collecting information, but as placing myself in a space where relationships with others come into being. Experiences in the field shake up and reshape the way you see the world and the things you'd always taken for granted. To embrace that process of transformation and use it to re-examine what it means to be human. That, for me, is what cultural anthropology is all about.

— What drew you to Cabo Verde?

My father is Japanese and my mother is British, but I grew up speaking French at home. My father is a French linguist, and when I was looking to pick up a new language at university, he suggested that learning Portuguese would open doors since Brazil is a BRICS nation, so I chose Portuguese as my major. Growing up in France, I also had many friends from African immigrant families, and my mother would tell me about Creole culture. All of these experiences came together and naturally drew me toward Cabo Verde.

Having grown up surrounded by French, Japanese, and English, I've always felt a certain fluidity in my own language and identity, and that personal experience resonated so deeply that I came to feel "Creole is my own life story," which is what led me to my current research.

■ The Resonance of Islanders' Memory: The Emotion Known as "Sodade"

— What makes Cabo Verde so compelling?

It's made up of 15 islands with beautiful beaches—think of it as somewhat like Okinawa. The population is just under 600,000, but over a million people with shared roots in the country's history of migration form a diaspora abroad, and the economy is sustained by overseas remittances and tourism. The islands were originally uninhabited until the Portuguese "discovered" them in the 15th century. They flourished as a waystation for the Atlantic slave trade, and it was through that history that European and African peoples came together, giving rise to a distinct Creole identity, language, and culture.

Deeply embedded in Cabo Verde's Creole culture is an emotion called "sodade," which also became the English title of my film. "Sodade" means something like nostalgia or a longing for home. It's a feeling that's inseparable from the islanders' history of repeated migration and separation. For me, it's these accumulated layers of memory stretching back to the era of slavery that make Cabo Verde so deeply fascinating. I'm also drawn to the people themselves. They may not be wealthy, but they love music, they drink the island's rum, they dance, and they live each day to the fullest. Perhaps because both countries are island nations, I sometimes feel a certain affinity with Japanese people, particularly in the tendency not to express emotions openly.



▲サンティアゴ島にあるタラファル・ビーチの風景
A view of Tarrafal Beach on Santiago Island



▲サントアンタン島の山間部に広がるバナナ園
Banana plantations spreading across the highlands of Santo Antão Island



▲ポルトガル・リスボンの古書店で購入した本
Books purchased at a secondhand bookshop in Lisbon, Portugal



▲ポルトガル・コインブラ大学への留学時代
During his overseas studies at the University of Coimbra, Portugal



研究最前線



Associate Professor Aoki and Carlos, gradually building a rapport through the course of the interviews

▲取材を通して次第に親しくなっていく青木准教授とカルロス氏



▲【映画】「カルロスのレシビ (Rhythms of Sodade)」のワンシーン [Film] A scene from "Rhythms of Sodade"

【映画概要】「カルロスのレシビ (Rhythms of Sodade)」(監督: 青木敬、長良将史/2025年/108分/カーボヴェルデ・日本) カーボヴェルデ北西部のサンヴィセンテ島。カルロスはアルコールと薬物依存に翻弄されながら日々を生きている。その歩みの背後に絶えず響いているのが、カーボヴェルデに深く根差した感情「ソダーデ」である。単なる郷愁を超え、奴隷制の時代から音楽を通して受け継がれてきたソダーデは、今も人々の記憶に息づいている。カルロスの声と記憶、そして音の風景をとらえることで、この民族誌映画はソダーデの一端を映し出す——それは個人の悲しみであると同時に、歴史が響かせる共鳴でもある。



▲カルロス氏を取材撮影する青木准教授 Associate Professor Aoki filming Carlos during an interview



▲東京ドキュメンタリー映画祭で「カルロスのレシビ」が準グランプリと観客賞をW受賞 "Rhythms of Sodade" won both the Runner-Up Grand Prix and the Audience Award at the Tokyo Documentary Film Festival

Tokyo Documentary Film Festival 2025



[Film Synopsis] Rhythms of Sodade (Directors: Kay Aoki, Masashi Nagara / 2025 / 108 min / Cabo Verde-Japan)

On São Vicente, in the Cabo Verde islands, Carlos spends his days caught in the underflow of alcohol and drug dependence. Running through it all is the less tangible but far more enduring feeling of "sodade". More than longing or melancholy, "sodade" is a cultural expression of absence and remembrance that has echoed through Creole lives since slavery. Woven into music and oral traditions, it carries displacement, resilience, and an unbroken connection to what has been lost. Through Carlos's memories and the soundscapes that shape them, this ethnographic film offers a glimpse of "sodade"—at once a deeply personal sorrow and a shared historical resonance carried in rhythm and voice.



▲舞台挨拶で共同監督の長良氏(左)とともに At the post-screening remarks with co-director Masashi Nagara (left)

島民の記憶の響き「ソダーデ」という感情

——カーボヴェルデの魅力は何ですか？

15の島々から成り、美しいビーチもある沖縄のような国です。人口は60万人弱ですが、国外には移動の歴史を共有する100万人以上から成るディアスポラ(移民やその子孫から成る国外居住者コミュニティ)が形成されており、海外からの送金と観光業が国の経済を支えています。もともとは無人島でしたが、15世紀にポルトガル人が「発見」。大西洋奴隷貿易の中継地として栄え、その歴史の中で、ヨーロッパ系とアフリカ系の人々が出会い、クレオールという人・言語・文化が形づくられていきます。

カーボヴェルデのクレオール文化には、私の映画の英題にもなった「ソダーデ」と呼ばれる感情が深く根付いています。郷愁や望郷に近いこの感覚は、移動や別離を繰り返してきた島民の歴史と強く結び付いています。奴隷制の時代から連なってきたこうした記憶の層そのものが、カーボヴェルデの大きな魅力だと感じています。裕福とは言えなくても、音楽を愛し、島のラム酒を飲み、踊りながら、「その日その日」を懸命に生きる人々の姿にも惹かれます。同じ島国ということもあり、感情をあからさまに表に出さないところなど、どこか日本人と通じるものを感じることもあります。

——映画の主人公・カルロスとはどうやって出会ったのですか？

2013年、2度目のカーボヴェルデ訪問では、フィールドワークのために半年間滞在しました。途中で資金が尽きて、寝る場所

もなく困り果ててバーのマスターに泣きついたところ、近所に住むカルロスを紹介されたのです。部屋を安く貸してくれ、一緒に酒を飲み、歌を歌って親しくなると、複雑な素顔も見せてくれるようになり、その生き方を記録させてもらうようになりました。

実は映画が完成した2025年夏、カーボヴェルデを豪雨洪水災害が襲い、カルロスのパートナーの女性が行方不明となるという悲報がありました。私も精神的に大きなショックを受けましたが、カルロスが泣くところを初めて目にし、改めて彼らが生活するのは、生と死が隣り合わせにある世界だということを知られました。

——映画制作での苦労と喜びを教えてください。

以前から映像人類学も少しずつ勉強していたのですが、本格的な映画制作は初めてで大変でしたね。共同監督の長良将史さんから機材の扱い方や編集の方法を学び、演劇関係の仕事に携わっていた母にもアドバイスをもらいつつ、授業の後に研究室にこもって、約2週間ほぼ寝ずに編集作業を続けました。一番の喜びは、映画祭で自分の映画が上映され、多くの仲間や両親が観てくれたことです。ただ「完成した作品を観てもらえた」という達成感だけではありませんでした。スクリーンを介して、観る側それぞれの経験や記憶が重なり合い、その場で新たな「ソダーデ」が立ち上がっていく感覚があったのです。それまで私にとって映画は、あくまで観客として消費するものでした。しかしこの作品を通して、映画は人と人との間に共鳴を生み出し、それぞれの感情や記憶が重なり合っていく場になりうるのだと実感しました。そのことに気づけた瞬間が、制作を通じて得た最大の収穫だったと思います。

映像人類学の視点でクレオール文化を追究

——「東京ドキュメンタリー映画祭」での反響はいかがでしたか？

審査員の1人からは、「世界各地を転々として故郷に戻ったカルロスの行動や奏でる音楽、作る料理からソダーデの感情が深く描かれている」と高い評価をいただきました。観客の方からも「カルロスが魅力的」、「クレオール文化に懐かしさを覚えた」などと好評で観客賞にもつながりました。自分の映画が私から離れ、独り歩きを始めた感覚でした。

——今後の上映予定と、新たな映像作品の制作予定を教えてください。

2026年5月13～17日開催の「German International Ethnographic Film Festival (ドイツ国際民族誌映画祭)」での上映選出も決まりました。

また、カーボヴェルデの3会場とポルトガルのリスボンでの上映が決まっています。今後はカーボヴェルデの音楽「モルナ」をテーマにドキュメンタリー映像作品を撮りたいと考えています。モルナはポルトガルのファドにも似ていますが、ゆっくりした4拍子で独特なリズム。歌詞はソダーデや愛を歌うものが多く、日本の演歌に似ているかもしれません。将来的には、カーボヴェルデにとどまらず、ポルトガル語圏の環大西洋世界に広がる音楽文化や日常実践を映像として記録し、アフリカの島嶼地域からブラジルに至るまで、人々が「混ざり合っていく」過程の先に何があるのかを探っていきたく考えています。その中で、世界各地に存在するクレオール文化を、より立体的にとらえていきたくですね。

—— How did you meet Carlos, the main subject of your film?

In 2013, during my second visit to Cabo Verde, I stayed for six months to conduct fieldwork. Partway through, I ran out of money and had nowhere to sleep, so I desperately turned to a bar owner for help and he introduced me to Carlos, who lived nearby. Carlos rented me a room at a low price, and as we grew closer by drinking together and singing, he gradually began to reveal the more complex sides of himself and eventually allowed me to document his way of life.

In the summer of 2025, just as the film was completed, Cabo Verde was hit by devastating floods, and Carlos's partner went missing in a tragic event. I was deeply shaken myself, but seeing Carlos cry for the first time drove home the reality that these people live in a world where life and death are never far apart.

—— Tell us about the challenges and rewards of making the film.

I'd been gradually studying visual anthropology for a while, but this was my first time making a full-scale film, and it was tough. I learned equipment handling and editing techniques from my co-director Masashi Nagara, got advice from my mother who has a background in theater, and then holed up in my office after classes, editing almost without sleep for about two weeks straight. The greatest joy was seeing my film screened at the festival, with so many friends and my parents there to watch it. But it wasn't just the satisfaction of having people see the finished product. Through the screen, each viewer's own experiences and memories seemed to layer on top of one another, and I could feel a new kind of "sodade" coming alive in the room. Until then, film had always been something I consumed as a spectator. But this project showed me that film can create resonance between people and become a space where individual emotions and memories converge and intertwine. That moment of realization was, I think, the most valuable thing I took away from the entire process.

Exploring Creole Culture Through the Lens of Visual Anthropology

—— What kind of response did the film receive at the Tokyo Documentary Film Festival?

One of the jurors praised the film highly, noting that the emotion of "sodade" was powerfully conveyed through Carlos's journey of wandering the world and returning home, as well as through the music he plays and the food he cooks. Audience members also responded warmly, with comments like "Carlos is captivating" and "Creole culture stirred a sense of nostalgia in me," and it was feedback such as this that ultimately led to the Audience Award. It felt like the film had left my hands and taken on a life of its own.

—— What are the upcoming screening plans, and do you have any new film projects in the works?

The film has also been selected for screening at the German International Ethnographic Film Festival, to be held May 13–17, 2026.

Screenings are confirmed for 2026 at three venues in Cabo Verde and in Lisbon, Portugal. Going forward, I'd like to make a documentary centered on "morna", the traditional music of Cabo Verde. "Morna" shares some similarities with Portuguese "fado", but it has a distinctive rhythm with a slow 4/4 time. The lyrics often deal with "sodade" and love, and in some ways you could compare it to Japanese "enka". Looking further ahead, I want to move beyond Cabo Verde and document the music cultures and everyday practices found across the Portuguese-speaking trans-Atlantic world—from Africa's island regions to Brazil—and explore what lies at the end of this ongoing process of people "blending together." Through that work, I hope to build a richer, more multidimensional picture of Creole cultures that exist around the world.

研究最前線 Research Front Line Website



Topics ■トピックス [学内情報]

◎ 関西大学協賛の「大阪マラソン2026」開催

関大ランナーやボランティアなど約400人が大躍動



2月22日、今年で14回目を迎えた「大阪マラソン2026」(大阪府・大阪市・大阪陸上競技協会主催)が開催され、“みんなでかける虹。”のスローガンのもと、フルマラソンと720(なにわ)マラソンを合わせた約3万4,000人のランナーが早春の浪速路を駆け抜けた。

当日、ランナーたちは大阪府庁前をスタートし、道頓堀や京セラドーム、四天王寺など大阪の名所を経て、ゴールの大阪城公園を目指した。沿道には大勢の観衆が詰め掛け、熱いエールでランナーを鼓舞した。

関西大学は1回目からオフィシャルスポンサーとして大会運営に協力しており、今大会も多彩な活動で地元大阪を盛り上げた。オリジナルTシャツを着用した関大ランナー約40人が出場したほか、給水ボランティアとして学生ら約200人が参加。さらに、沿道には「ランナー盛上げ隊!」として約140人が集結し、本学の応援団や学生チーム「漢舞」(かんまゐ)、放送研究会(KBC)、関西大学カイザーズクラブチアダンススクールによる力強いパフォーマンスが大会に華を添えた。また、33km地点の給食所「まいどエイド」では、社会学部・劉雪雁教授ゼミの学生がたこ焼きなど大阪名物を提供し、ランナーにエネルギーを届けた。



20日、21日にはインテックス大阪で「大阪マラソンEXPO 2026」が開催され、本学ブースでは、経済学部・佐々木保幸教授ゼミの学生がプロデュースした「泉州タオル」の販売や、よさこい衣装の試着、応援団員と記念撮影ができる特設フォトブースを設置し、多くの来場者で賑わった。「Osaka ええやんステージ」では、Osaka Metro主催「ギネス世界記録™に挑戦! みんなで創る大阪マラソン応援モザイクアート」が世界記録(参加者数15,052人)の認定を受け、認定授与式が実施された。デザインを担当したマス・コミュニケーション学研究部の坂本理彩さんが登壇し、大阪マラソンやモザイクアートに込めた思いを語った。

◎ 第34回「関西大学体育振興大島鎌吉スポーツ文化賞」授与式を挙

2025年度に活躍した関大アスリートの功績を称えて



▲受賞学生を代表して高橋智幸学長から賞状を授与される山口花音さん(左)

3月11日、千里山キャンパスにて、校友会の支援のもと第34回「関西大学体育振興大島鎌吉スポーツ文化賞」授与式が執り行われた。本賞は、世界的に活躍したオリンピックであり関西大学卒業生の大島鎌吉氏の偉業を称え、1988年に創設された文化表彰制度で、本学のみならず日本におけるスポーツ文化の

振興及び推進に資することを目的としている。

個人の部では、FISUワールドユニバーシティゲームズの女子ダブルスと女子団体(日本代表)で優勝したテニス部の山口花音さん(経済学部4年次生)や、同大会女子ハーフマラソン団体(日本代表)で優勝した陸上競技部の前田彩花さん(商学部3年次生)ら計10人が受賞。団体の部では、弓道部、拳法部、テニス部、馬術部が受賞した。また、広く社会的なスポーツ文化の発展に貢献し、顕著な実績を残し、本学とかかわりを持つ団体及び個人として、本学アイススケート部OBでプロスケーターの高橋大輔氏に同賞が授与された。

◎ 第30回関西大学先端科学技術シンポジウムを開催

多彩な分野の最先端研究成果を披露



1月22日と23日、第30回関西大学先端科学技術シンポジウムを千里山キャンパスにて開催した。

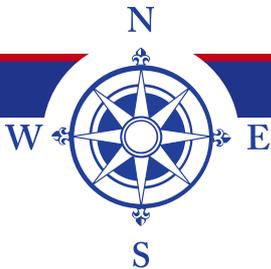
本シンポジウムは、先端科学技術推進機構の研究員が取り組む多彩な研究成果を発表し、広く社会や企業、産業界との連携を図る学術交流イベント。今回のテーマは「“Beyond SDGs” Well-being 社会のための科学技術」。2019年にリチウムイオン電池の

研究でノーベル化学賞を受賞した吉野彰氏による特別講演「2050年の世界をめざして」で開幕し、持続可能な社会に向けた科学技術の貢献について、四半世紀後の世界を見据えた提言がなされた。

各会場では2日間で15件のセッションと93件のポスターセッションが行われ、企業関係者と本学学生らが熱心に議論を展開。延べ1,315人以上の参加者を迎え、盛況のうちに幕を閉じた。

KANDAI

■ 関大ニュース



NEWS

インドの教育コンサルティング企業Acumen社と覚書を締結



関西大学は1月27日、インドを中心に大学・教育機関の国際展開支援を行う教育コンサルティング企業Acumen社と、国際教育分野における連携強化を目的とした覚書(Memorandum of Understanding: MOU)を締結した。



日本の大学としては初となるパートナーシップ締結を通じて、関西大学が推進する国際教育・グローバル人材育成と、Acumen社の教育機関支援におけるネットワーク・知見を基盤に、学生・学術交流の促進や国際教育の質的向上、グローバル人材の育成等に取り組む。

「関西大学フラッグシップ研究プログラム」を新設

関西大学は、将来の本学を代表する研究拠点の形成を目指し、2026年度から新制度「フラッグシップ研究プログラム」を始動する。

本プログラムは、1件につき10年間・計1億円以上という、私立大学としては異例の長期的かつ大規模な学内研究支援制度。本学のトップクラスの研究プロジェクトを対象に、学内外の英知を結集し、国際的かつ分野横断的な共創ネットワークを形成するとともに、大型外部資金の獲得前後を含めた3つのフェーズで持続的な支援を行い、本学の看板となる優れた研究の育成を図る。

関西大学フラッグシップ研究プログラムの支援イメージ

学内研究費、外部資金を組み合わせ、10年以上の長期支援を実現

学内研究費 Step 1 準備フェーズ 2年以内 年1,000万円以内	外部資金 Step 2 外部資金フェーズ 年2,000万円以上の外部資金獲得	学内研究費 Step 3 発展フェーズ 3年以内 年3,000万円以内
---	---	---

外部資金事業終了後の継続支援により、若手研究者の育成を含めた長期間の研究計画が可能になるなど、長期支援ならではのメリットを創出

「マイボトル洗浄機」でプラスチックごみ削減を推進



1月26日、象印マホービン株式会社が2025年大阪・関西万博に設置した「マイボトル洗浄機」を千里山キャンパスに移設した。これにより、マイボトル利用時の洗浄の手間を解消し、学生・教職員の更なる利用促進を図る。

関西大学では2020年度からウォーターサーバーを導入し、使い捨てプラスチックごみ削減に取り組んできた。2023年には同社を「関西大学SDGsパートナー」に迎え、2024年には共同で「関大マイボトルアンバサダー『ECOひいきプロジェクト』」を始動するなど、産学連携によるマイボトルの普及に努めている。

サッカー部の浅田慧潤さんがカマタマーレ讃岐に入団内定



2026年シーズンから、体育会サッカー部の浅田慧潤さん(人間健康学部4年次生)がJリーグ・カマタマーレ讃岐に選手として加入することが内定した。

浅田さんのポジションはフォワード。相手ディフェンダーを置き去りにする鋭いドリブルと卓越した決定力で、チームを勝利へと導くストライカーだ。ボールを収める巧みな技術で、味方に時間とスペースをつくり出せるのも大きな強み。Jリーグの舞台での更なる飛躍が期待される。

▲写真提供:関大スポーツ編集部

日本学生氷上選手権大会

アイススケート部の片伊勢武さんが個人2位 男子団体は3年ぶりの準優勝

1月8～11日、第98回日本学生氷上競技選手権大会フィギュア競技が東京辰巳アイスアリーナで行われ、男子シングルで片伊勢武さん(法学部4年次生)が総合216.20点をマーク。冒頭のトリプルアクセルを滑らかに降り、その後の3回転ジャンプをすべて着水して会場を沸かせ、準優勝の栄冠を手にした。



▲アイススケート片伊勢さん



▲アイススケート団体

また、男子団体では関西大学が3年ぶりの準優勝をつかみ取った。

KANSAI UNIVERSITY SOCIAL MEDIA

